

2019. 9. 1. 聖霊降臨節第13主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書5章1-11節

『沖に漕ぎ出してみなさい』

中野翠という人がいます。コラムニスト、エッセイストと呼ばれる文筆家です。週刊誌に長期にわたって連載しているエッセイがあり、お読みなっただ方もおられるでしょう。彼女の書いた本で、「小津ごのみ」という本があります。小津、というのは小津安二郎という映画監督のことで、中野さんは小津さんの映画が大好きで、小津さんと小津さんの映画のことだけで、一冊の本を書いたのです。むずかしい言葉など使わないで、しかし皮膚感覚に届く言葉で、小津映画のここが好き、ということ書いている本です。この本の中で、中野翠さんが小津映画の登場人物の言葉遣い、セリフについて書いているエッセイが何本もあるのですが、とても心に響きました。

それはセリフの意味について自分の理屈をこねまわすというようなことではまったくなく、例えばちょっと古風で、平凡で、日常的な言い方の中に、脚本を書いた小津さんから引っ張られていくような、小津さんの言葉の力に自分が引きずられていく、それをとても素直に受けている、そういう聞き方をしているのです。映画の中で、語られるセリフに聞いて、その言葉の力に引っ張られながら味わっていくような、そういう聞き方をしているのです。

主イエスのカファルナウムでの伝道が始まり、人々が次第に主イエスのもとに押し寄せるようになってきました。ゲネサレト湖畔、これはガリラヤ湖のことですが、主がそこに行かれると、群衆が神の言葉を聞こうとして集まってきた、のです。神の言葉を聞こうとして集まってくる、ということ自体、とても強い、聞こうという熱心にあふれています。

そこで主は岸边にあった二艘の舟のうち、シモンの持ち舟に乗せてもらい、岸から少し漕ぎ出したところから人々に説教されました。シモンは、夜通し漁をしたのに、なにをとれず、疲れと徒労感の中で網を洗っていたのでした。シモンは主イエスを家に迎え、姑を癒してもらったペトロです。熱心に主の語ることを聞いたとしてもおかしくはない人です。しかしシモン自身は、少なくとも今は、神の言葉を聞くよりも、家に帰って寝たい、と思っていたかもしれないし、空手で帰る虚しさで一杯一杯だったかもしれない。熱心に主イエスの言葉を聞こうとしていたのは群衆であり、シモンは成り

行きだった。

ところが、群衆にむけて語られた説教が終わった時、突然主イエスがシモンに向けてこう語りかけてきた。「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」。

この場面をよくよく考えてみてください。漁のプロたちが一晩中経験と勘を働かせて、とりくんだのに、魚は取れなかったのです。しかも陽は昇って、魚の取れない時間になっている。主イエスの言葉のなんという素人考え。シモンはこう言ってもよかった。「わたしに漁のことで指示しないでください。他のことはともかく、漁に関してはわたしたちがプロなんですから。」そう言っても何もおかしくないし、漁師がイエスの言葉を無視しても当然と言えば当然。

しかし、シモンはこう言うのです。「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、なにもとれませんでした。しかしお言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」

どうしてシモンは網を降ろそうなどと言い出したのでしょうか。くたくたに疲れていたはずです。一晩中網を降ろし挙げる、ということがどれほどのことか。懸命に働いたのに、何の収穫もない、その虚しさだって引きずっていたでしょう。今からもう一度沖に漕ぎ出すなんて。

シモンの気持ち、思いはどこにあったのか。5節の言葉、もう少し直訳してみると、「お言葉ですから」と訳されているところは、あなたの言葉だけにより頼んで、あなたの言葉、とはっきりなっています。あなたの言葉だけが理由で、あなたの言葉だけに基づいて、あなたが語った言葉に賭けて、と訳しうる言葉です。シモンがもう一度網を降ろそうとしているのは、主イエスが語った言葉だから、それだけの理由で、やってみますと言っているのです。

自分としてはやれることは全部やったのに、魚が取れなかった、だがあなたの言葉だからもう一度やってみましよう、という場合、普通に考えれば、可能性があるのは、自分より漁の知識も、経験もある人、ガリラヤ湖のことも自分よりも熟知している人、その人が言うなら、やってみましよう、でしょう。しかし、この場合、イエスはそれ該当しない。漁の知識も経験も全くないのです。そのイエスに対してシモンがあなたの言葉ですから、といったのだとすれば、漁の知識と経験とは関係ない、もっとまったく別なこと、イエスという方の言葉の持つ力、語りかけてくる力、イエスの人格、この人が言うのであれば、ということは何らか感じてのことでしょう。シモンは、ここまで、主イエスの言葉を会堂で聞き、また自分の家で聞き、この湖の畔でも聞いています。そこで主イエスの言葉から何かを感じていたのです。この方の言葉は、聞いていかなくてはならない、聞いていきたい、聞かせていただき、そういう何かです。湖の畔で主

イエスの言葉を、説教を聞いている人は、たくさんいたのです。シモンよりもっと熱心に、ファンのようについてきた人たちもいたのです。そしてその中にはおそらく主イエスの話に感動したり、心引かれたりしたものもいたでしょう。けれども誰も主イエスに従って来てはいないのです。ただ話を聞いただけ。ちょっと感動したり、ちょっと心惹かれて、それでおしまい。

シモンも主イエスの話を聞いただけで終わりにしてもよかったはずですが。ちょっとした感動で終わってもよかった。ところが違うのです。彼は違うのです。「しかしお言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」もっと厳密に訳すと、「しかし、あなたの語られた言葉に頼んで、わたしは網を降ろします。」他の人がどうであれ、わたしはやってみます、と応えたのです。

シモンは主イエスを信頼して、主イエスの言葉にひっぱられて、主の言葉に引きずられるようにして、命じられたとおりに沖に漕ぎ出すのです。確かに漕ぐのは、シモンです。しかしシモンに従う思いを与えたのは、主イエスであり、主イエスの言葉なのです。ここでシモンは人の話を聞いて、ただ感動するとか、いいなと心惹かれるというのではなく、その相手の言葉に従って歩みだす、ということを経験しているのです。

シモンはここで主と出会う、という経験をしている。自分のやったことがうまくいかなかった、なんの結果も残せなかった、何のために今日一日苦労したんだ、という徒労感がある。にもかかわらず主イエスの言葉に従った、ということは、自分の経験や知恵や技術とは全く別の世界、それを超え出ている世界からの呼びかけに聞いているということです。この方の言葉には聞いて、引っ張られていきたい、それは自分の持てる力とは全く違う、自分の知識とか経験とは全く違う、この方の力。それに信頼し委ねる、託していく、信じるという世界の入り口にシモンは足を踏み入れている。

漁師たちがその通りにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一艘の舟にいる仲間と合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。これを見て、シモン・ペトロはイエスの足もとにひれ伏して「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深いものなのです。」と言った。

シモンは主イエスの言葉に信頼して舟を漕ぎ出した。しかし自分の経験知や、人間的な知恵を全く超えた神の子の力を目の当たりにして、自分の中の神に対してもたかをくくっていたこと、神の言葉よりも自分の言葉を実のところ重んじてきたこと、そんなあれやこれやを思いめぐらし、主イエスの前での自分は罪深い自分としか言いようがなかったのではないかと。

矛盾しているようですが、従ってみて、初めて自分が神の言葉の前でいかげんだった、ということに気づいた。シモンははじめ先生と、イエスのことを呼んでいたのに、ここでは主よ、と呼んでいます。自分の主、あるじを見ているのです。シモンはこの出来事の中で、神からの光を見たのではないか、もっと言えば神が現臨しているという光を受けたのではないか。

主イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」この恐れるな、ということはあなたの罪は赦される、という意味が込められている、とされています。わたしは罪深い、といったシモンに対して、大丈夫だ、あなたの罪は赦される、そう言って離れようとするシモンにさらに近づく。そしてあなたは人間をとる漁師、人間を救う漁師になるのだ、と呼びかける。ここには教会の原型があると断言している。この岩ペトロの上に教会を立てる、と後に主が言われる、教会の原型があります。そこで彼らは舟を陸に引き上げて、すべてを棄ててイエスに従った。シモンを始め他の漁師たちも、主の言葉を聞いて、従う、という歩みを始めた、そこにこそ、キリスト教信仰の始まりがあります。主の言葉に聞いて従う、そこにわたしたち全員に関わる召命の招きがあるのです。

D a t a : 聖霊降臨節第13主日礼拝式説教

讃美 : 前516、後557

新生教会礼拝堂